

発症から数時間で急激な視力低下招く「網膜中心動脈閉塞症」**重い眼疾患 改善に光**

臨床試験の成果について語る中沢教授(左)と津田准教授

東北大学大学院医学系研究科の中沢徹教授、津田聡准教授(ともに眼科学)らの研究グループは、重い眼疾患の網膜中心動脈閉塞症の治療薬開発に向けた臨床試験で、内服薬による視力改善の効果と安全性を確認した。製薬会社と共に最終段階の臨床試験を継続しており、順調に進めば今後4、5年ほどで実用化される可能性がある。

神経細胞保護効果に着目**「予想以上の効果」**

網膜中心動脈閉塞症は、網膜の主要な血管が血栓によ

って閉塞し、発症から2、3時間で急激な視力低下につながる眼疾患。患者は人口10万人当たり2、3人程度とされる希少疾患だが、有効な治療法は確立されていない。

研究グループは、過剰に活性化すると神経の細胞死を誘導する「カルパイン」と呼ばれるタンパク質分解酵素に着目。千寿製薬(大阪市)が別の眼疾患の治療のため研究開発したカルパインの阻害作用がある内服薬を使い2019年から約2年間、東北大病院で医師主導の臨床試験を実施し

試験は東北大同窓生の開業医らの協力を得て、発症から3〜48時間が経過した患者20人を対象とした。1日100ミリまたは200ミリの錠剤を1カ月間服用してもらった後、さらに2カ月間にわたり、安全性や有効性を評価した。

分析の結果、200ミリの錠剤を服用した患者グループで、統計的に有意な視力改善が示唆された。読める文字数(最大100文字)を測る方式の視力検査で、可読範囲が平均して25文字以上増えたという。

最終的な臨床試験は千寿製薬が中心となつて国内各地の病院で24年に始まり、現在はデータ分析の段階にある。安全性や有効性が確認され、国の承認を得られれば、新薬として製造販売される見通し。

中沢教授は東北大での臨床試験について「従来は網膜の血栓を溶かす手法などが研究されていたが、うまく治療効果が出ていなかった。神経細胞を保護するメカニズムに基づく治療を目指し、予想以上の効果が得られた」と手応えを語った。

研究グループによると網膜中心動脈閉塞症の予防は、脳梗塞の予防と同様に、血圧管理や血栓予防が有効になるとい

う。(小沢邦喜)

東北大院・中沢教授ら臨床試験